

研究・調査報告書

報告書番号	担当
144	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Heavy episodic drinking in early adulthood and outcomes in midlife. 成人早期の一時的な過度の飲酒と中年期のアウトカムについて	
執筆者	
Sloan F, Grossman D, Platt A.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
J Stud Alcohol Drugs. 2011;72(3):459-70.	
キーワード	
若年期 過度の飲酒、中年期の影響、健康アウトカム	
要 旨	
目的: どの程度の成人早期の飲酒習慣が中年期まで持続し、成人早期の頻回の一時的な過度の飲酒が教育的到達度、就労状況・条件、および中年期の健康アウトカムに関連するかを評価すること。	
方法: The National Longitudinal Survey of Youth 1979 を用いて、1982 から 1984 年のベースライン調査時において、1 回あたり 6 杯以上の飲酒機会の回数をもとに、対象者を 3 群に区分した。区分は、頻回、時より、その他/禁酒者とした。Propensity score matching を用いて、中年期の飲酒量、教育的到達度、就労状況・条件、および健康アウトカムについて、上記 3 群を比較した。	
結果: 頻回群は、その後 25 年の追跡期間中に有意に飲酒量が減少していたが、他の 2 群と比較して、1994 年時点でのアルコール中毒、アルコール依存、および 25 年追跡調査時の頻回の一時的な過度の飲酒の割合が非常に高かった。Propensity score matching 後では、頻回群における中年期までの教育修了期間、中年期における就労率、賃金条件、および健康アウトカムとの有害な関連は確認されなかった。追跡期間中の生存率も様々であった。	
結論: 成人早期（17 から 25 歳）の頻回の一時的な過度の飲酒は、10 年後のアルコール中毒、アルコール依存の増加、および 25 年後の飲酒量と関連していたが、中年期の他のアウトカムとは関連がなかった。中年期のアウトカムに有意差がつかなかった理由について、頻回群において一時的な過度の飲酒者が減少したことが考えられる。	